

琉球大学学術リポジトリ

【《UH・UR合同シンポジウム》報告】映像表象における沖縄の「アメラジアン」

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2014-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野入, 直美, Noiri, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30156

《UH・UR 合同シンポジウム》報告

映像表象における沖縄の「アメラジアン」

野入 直美*

AmerAsians in Okinawa as Media Image Representation

NOIRI Naomi

要旨

本報告では、アメラジアンがメディア表象の中でスティグマ化される客体であることを脱し、表象のイニシアティブを取り戻そうとする試みについて、アメラジアンスクール・イン・オキナワの中学生たちが制作したドラマ“Doubles World”を用いて考察する。そのドラマは、マイノリティの子どもたちが体験してきた同化圧力の暴力性をリアルに描き出す一方で、ジェンダー化されたファンタジーによって牽引されている。マイノリティが表象におけるイニシアティブを回復するプロセスが、複数の権力関係やヘゲモニー葛藤をはらんだ複雑な相互行為であることが見いだせる。

In this paper the efforts of AmerAsians to regain initiatives in representation after getting out of being stigmatized objects in media representation are studied using the “Double World,” a drama created by junior high school students of AmerAsian School in Okinawa. The drama realistically depicts violent nature of pressure to assimilate that minority children had gone through. On the other hand, a fantasy characterized by gender-consciousness plays a role of powerful magnet. The process to restore (recover) their way of taking initiatives in the representation can be found to be complicated actions against each other that are associated with multiple power relationships and struggle for hegemony.

* 琉球大学法文学部人間科学科准教授 Associate Professor of Department of Human Sciences, Faculty of Law and Letters, University of the Ryukyus.

問題の所在

ここでは、沖縄のアメラジアンをめぐる映像表象について、ニュース番組、ドキュメンタリー映画、コントの舞台、そしてドラマ作品を通して考察する。

ニュース番組は、筑紫哲也 NEWS23 (TBS テレビ) の特集「もうひとつの沖縄の現実ーアメラジアン」(1998年8月16日放映)をとりあげる。この特集は、1998年6月1日にアメラジアンスクール・イン・オキナワ (以下、アメラジアンスクールと表記) が設立されてから初めての、日本における全国規模のメディア報道となった。それは「アメラジアン」という言葉の社会的な認知を広め、揺籃期のアメラジアンスクールに支援者が集うきっかけをもたらしたが、同時に「アメラジアン」の子どもたちを「基地の落とし子」としてスティグマ化するという側面を有していた。

ドキュメンタリー映画としては、レジー・ライフ監督による“DOUBLES: Japan and America's Intercultural Children” (1995年。邦題:「ダブルズー日米二つの文化を生きる」)を事例とする。自らがアフロ系アメリカ人というマイノリティとしての当事者性を有した監督が、共感のまなざしをもって「ダブル」の人びとを描いた作品で、さまざまな世代、地域、職業の「ダブル」の人びとがカメラの前に座り、自らの体験と思いを語る。非当事者が当事者を対象化した表象と、当事者自身による表象との境界に位置する作品であると言えるが、ダブルの人びとを「肯定的に」表象することの難しさが示唆されているように思われる。

コントの舞台は、もともとはライブであるが、ここでとりあげる「お笑い米軍基地」の舞台は実録がDVDとして市販されているため、映像表象のひとつとして位置づける。「お笑い米軍基地」は、沖縄お笑い芸人FECという団体が提供しているコントと芝居からなるパフォーマンスである。2011年の第7回公演では、「ハーフ芸人」ニッキーが「自虐ネタ」の(あるいは「自虐ネタ」という体裁をとった)ギャグを飛ばし、さらに米兵役で、醜悪きわまりない「アメじょ」⁽¹⁾、“アメリカ人の男を追いかけまわす女たち”を笑いのめすコントに出演している。ここには、スティグマ化される側とする側、笑われる側と笑う側の錯綜が見いだせる。

最後にとりあげるドラマ作品は、アメラジアンスクールの中学生クラスが制作した“Doubles World”で、DVD「We are all STARS!!アメラジアンスクールの挑戦」(アメラジアン映像プロジェクト、2011年)に収録されている。それは、子どもたちが体験してきた同化圧力の暴力性をリアルに描き出す一方で、「少年が少女を救う」というジェンダー化されたファンタジーによって牽引されており、マイノリティの排除をめぐる、矛盾あるいは欠落をはらんだ構造を有している。

いったい誰が、誰によってスティグマ化されているのだろうか？

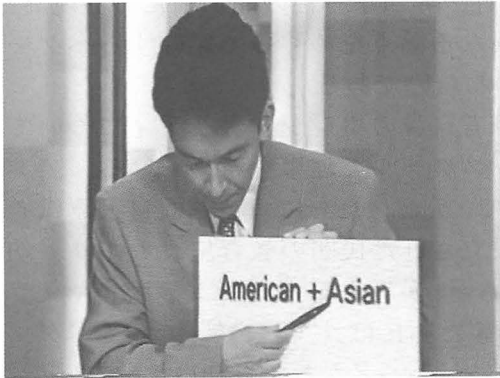
表象をめぐるポジショナリティ、当事者性－非当事者性の間に横たわる境界、そしてエスニシティとジェンダーという異なる論点をめぐって錯綜するヘゲモニー関係について考察することが、本稿のねらいである。

分析に先立って、呼称・自称の問題と筆者自身のポジショナリティについて言及しておきたい。筆者は、アメラジアンスクールで理事を務めている。アメラジアンスクールは、5人の母親らによって、子どもたちに肯定的な自己認識を育む「ダブルの教育」を提供するために設立された民間の教育施設であり、幼稚園から中学生までの約70人の子どもたちが、英語と日本語によるカリキュラムで学んでいる。とくに設立に関わった母親たちには「“ハーフ”でなく“ダブル”として生きてほしい」という願いが強いが、子どもたち自身は、「アメラジアン」や「ダブル」だけでなく「ハーフ」という言葉も日常的に多用しており、それを咎められることもない。筆者自身は、アメラジアンスクールに対して第三者ではないが、「アメラジアン」あるいはその保護者という当事者性は有していない。日常でも論文執筆においても「アメラジアン」という言葉を用いているが、それは筆者の立ち位置に基づいた呼称であり、他の呼称または自称をやみくもに排斥するスタンスには立っていない。

本稿でニュース特集、ドキュメンタリー映画、コントとドラマを分析するにあたっては、それぞれの制作者が用いている呼称または自称を、鍵カッコつきで記述する。ニュース特集は「アメラジアン」、ドキュメンタリー映画は「ダブル」、コントは「島ハーフ」と「ハーフ」、そしてドラマは「ダブル」という呼称または自称を用いている⁽²⁾。それらの言葉の選択は、ポジショナリティの問題に深く関連するのである。

1. ニュース特集における「基地の落とし子」というスティグマ －筑紫哲也 NEWS23 (TBS テレビ)「もうひとつの沖縄の現実 －アメラジアン」

アメラジアンスクールが設立された1998年6月1日のおよそ2ヵ月後、1998年8月16日に、筑紫哲也 NEWS23は全国で初めて、「アメラジアン」についての全国ネットでの報道を行った。筑紫は、沖縄の基地問題に深い関心を寄せてきたジャーナリストとしてよく知られている。この15分間の特集は、単にアメラジアンについて先駆的にとりあげるにとどまらず、子どもたちをとりまく深刻な問題状況を描き出し、そこから基地の島・沖縄の現状を全国に伝える構成となっている(表1)。



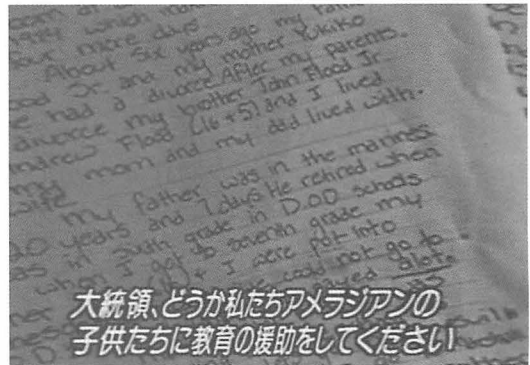
画像 1：特集「もうひとつの沖縄の現実ーアメラジアン」の冒頭では用語の解説が行われた。©TBS テレビ

メラジアンの子どもたちに援助をして下さい」と記されている点である（画像 2）。注意深く観ていると、この特集が「ハーフ」ではなく「アメラジアン」という言葉を一貫して用いていることがわかる。当事者が自称している場合においてさえ、しかも日本語の「ハーフ」ではなく英語の「日米ハーフ (half-Japanese half-American)」という表現であっても、「ハーフ」という言葉は蔑称として避けられている⁽⁴⁾。

設立まもないアメラジアンスクールは、「行き場のない子どもたち」の願いがひとつの形になったものとして登場する。まだ駐労センターの貸会議室でサマースクールの授業をしていた頃で、カリキュラムや教材も整っていない⁽⁵⁾。取材は、アメラジアンスクールの教育内容よりむしろ、設立の経緯や、アイデンティティなどの問題を焦点化していく。

「アメラジアンの子どもは公立学校にも行けるが、それでは解決にならない」という文脈で、ひとつのエピソードが紹介される。ひとりの母親が、沖縄戦が終結したとされる慰霊の日の前後に行われる平和学習をきっかけに、息子が公立学校で深刻ないじめに遭ったことを語るののである（表 1 タイム 0:14:10）。後半部分では、「アメラジアン」の成人女性が登場し、「制服を着て公立学校に通っているだけで、お父さんがいない子ってみんなに知られてしまう」「基地はない方がいいんです。でも、基地があるから私たちハーフが生まれた。基地は

特集は、スタジオで記者が、「アメラジアン」という言葉の説明をする場面から始まる（画像 1）。そして冒頭のエピソードは、クリントン大統領にあてられた少女⁽³⁾の手紙から始まる。彼女の手紙は、父親の退役によって米軍基地内の学校での無償教育の対象から外され、学ぶ場を失ってしまったことを訴えている。この場面で興味深いのは、その手紙が“Could you please help us half-Japanese half-American kids?”（私たち日米ハーフの子どもに援助をして下さい）と英語で読み上げられるのに対して、日本語訳の字幕は、「私たちア



画像 2：手紙自体においては“half-Japanese half-American kids”という表現が用いられている。©TBS テレビ

私たちハーフの故郷なんです」と語る（タイム 0:06:29、0:13:21）。続いて、ひとりの少女が、会ったことのない在米の父親に宛てて書いた手紙が登場する。「お父さんの写真を友達に見せたら笑顔が似ていると言われてうれしかった」という少女は、父親への慕わしさを手紙につづっている（タイム 0:13:46）。

そしてこの特集は、「沖縄から米軍基地がなくなる限り、このような子どもたちは存在し続けるのです」という言葉で結ばれるのである。

このニュース特集は、「アメラジアン」という言葉の社会的な認知や、沖縄県内外からの支援の広がりなど、当事者にとって大きなインパクトをもたらした。この番組によって、「アメラジアン」という言葉を知ったという人は少なくない。当時、アメラジアンスクールは母親たちによって設立され、全くの無認可校としてスタートしたばかりで、現在のような日本語教員派遣などの公的支援も一切なかった⁽⁶⁾。教育委員会は「保護者には就学義務がある」⁽⁷⁾として、学校法人格を持たないアメラジアンスクールに通う子どもたちを問題視しており、行政と対峙しながら立ち上げた学びの場が存続できるのか、確固たる見通しはなかった。筑紫哲也 NEWS23 は、このような時期に、県内外からさまざまな支援者が集ってくるきっかけをもたらした。特集に描かれている沖縄における差別、公立学校におけるいじめは、むしろ沖縄社会にメンバーシップを持つローカル・メディアには描きにくい問題であり、当事者が体験を説明することも難しい事柄であった。

一方で、その特集では、アメラジアンスクールの所在地は米軍の戦闘機が飛行するシーンに続いて映され（画像 3）、「行き場をなくした」（表 1 タイム 0:00:57）、「取り残されている」（0:01:58）、「基地から放りだされ、差別や偏見の波にもまれる子どもたち」（0:10:12）という言葉で子どもたちが描かれた。



画像 3：同番組で、アメラジアンスクールの所在地を示すのに、まず戦闘機がクローズアップされ、その下にアメラジアンスクールと子どもたちが描かれた。©TBS テレビ

そこに表象される「基地の落とし子」(0:12:47)としての「アメラジアン」は、まぎれもない「沖縄の現実」である一方で、子どもや母親にとっては、子どもたちの複雑で多様なリアリティを篡奪し、“負”の表象を押しつけるスティグマという性質をも有していた。

筑紫哲也 NEWS23 の特集におけるそのような要素は、それに続くメディア各社の報道姿勢に継承された。筆者自身も、アメラジアンスクールの生徒たちを基地のフェンスの前に連れて行ってその前を歩くシーンを撮りたいという記者に、アメラジアンスクールの理事として、とりやめるように話をした体験がある。「一番悲惨な子を紹介してください」という取材依頼をされたこともある。学校長のセイヤーみどりさんは、「基地問題としてではなく、子どもたちの学びと成長を見てください」とメディア関係者に要請し続け、「かわいそうな子ら」としてアメラジアンスクールの生徒たちが表象されることのないように努めてきた。その結果、近年は戦闘機が飛ぶ下にアメラジアンスクールがあるという類のメディア表象は見られなくなったが、「基地の落とし子」としてのニュースバリューを自ら封印した結果、アメラジアンスクールに対する取材の申し込みは設立期に比べて大幅に減少している。

2. ドキュメンタリー映画における「ダブル」の“肯定的な”表象

— レジー・ライフ監督“DOUBLES: Japan and America’s Intercultural Children” (邦題：ダブルズー日米二つの文化を生きる) (1995年)

レジー・ライフ監督が制作したドキュメンタリー映画“DOUBLES”では、85分間の作品のほとんどのシーンが、カメラに向けて自分自身の体験と思いを語る「日米ダブルズ」のインタビューシーンで構成されている。何人かの著名人も登場するが、ほとんどはいわゆる一般庶民である。彼らの日常生活とインタビューシーンが延々と続いて、それでも飽きがこないのは、第二次世界大戦後から現代に至る時間軸、そしてアメリカから日本に及ぶ空間軸を縦横に行き来し、さまざまな世代、地域、職業の「ダブル」ひとりひとりの〈声〉に肉薄した作品の構成力にあると思われる。

さらに、レジー・ライフ自身がアフロ系アメリカ人というエスニック・マイノリティとしての当事者性をもっているということも、ドキュメンタリーを制作する上で意味を持ったのではないかと考えられる。登場するほとんどの人びとは、リラックスした表情で、インタビューを楽しんでいるかのようにカメラに向かっている。自分が話すことを相手が受け止めてくれるだろうという安心感が、映像を通して伝わってくる。率直に、ときにはユーモアを交えて語られる〈声〉には、観る者を説得する力がある。その〈声〉はおそらく、カメラが回される前に、レジー・ライフと「ダブル」の人びとが交わした会話や相互行

為の延長線上に発せられたものなのである。この作品を特徴づけているのは、それらの〈声〉に共感し、「ダブル」の人びとを肯定的に描こうとする制作者の姿勢であり、撮影する側と撮影される側との間に培われた信頼感であるように思われる。

レジー・ライフ自身は、映像には登場せず、黒子のようにダブルの人びとの率直なく〈声〉を引き出す役割に徹しているかのように見えるが、一方で、彼はいくつかのテーマをもってドキュメンタリーを構成している。そのひとつは、第二次世界大戦直後に生まれた「ダブル」と現代に生きる若い世代との、体験と意識の相違である。作品は、ミズーリ号船上の調停におけるマッカーサーの演説シーンから始まる。第二次世界大戦がアメリカの戦勝、日本の敗戦という形で終結したことを象徴する場面が続いて、終戦から間もない時代のアメリカ人男性と日本人女性の国際結婚、そこで生まれた子どもたちのことが描かれる。両親の結婚を許せず、結婚式にも来なかった日本人祖父母のエピソードや、たくさんの孤児たちの存在、国際結婚やそれによって生まれた子どもたちに対する根深い差別と偏見も語られる。やがて場面は切り替わり、現代の若い「ダブル」が登場する。大企業で働き、ニュースを報道する彼らは、「今の時代は、周りの人と違っての方が有利だ」と言う。「ダブルに生まれてよかった」「ハーフというよりダブルというほうがしっくりくる」などの言葉が語られる。作品の終盤では、学校ですさまじいじめに遭った小さな子どもも登場し、「昔に比べて今はよくなった」ということが必ずしも普遍的なパターンではないことも押さえられてはいるのだが、大枠では、「終戦直後の貧困と差別の時代は過去のものになり、現代のダブルズはダブルであることを謳歌している」という構図が展開される。

そこでは、レジー・ライフが黒子として「ダブル」の人びとのありのままの〈声〉を引き出しているのか、あるいはレジー・ライフの構想に沿って、「ダブル」の人びとの〈声〉が選りとりられ、並べられて作品化されているのかを、観る側が判断することは難しい。おそらくはこのどちらでもあり、マイノリティとしての当事者性をもって、「ダブル」の人びとの〈声〉を共感豊かに描き出し、同時に制作者としての意図をもって、その〈声〉を作品の素材として対象化しているのではないだろうかと思われる。すぐれたドキュメンタリー映画の多くがそうであるように、“Doubles (ダブルズ)”は高度にフィクショナルでもある。レジー・ライフ監督のポジショナリティは、非当事者—当事者、〈声〉の聞き手—作品の作り手の間を自在に行き来する、巧みささえ感じさせる境界性にあると言えるだろう。

さて、時代性と並んで、レジー・ライフが抱いているもうひとつのテーマは地域性である。アメリカ合衆国も日本も、それぞれひとくくりにされず、さまざまな地域で取材が行われている。とくにアメリカでは、ハワイ州が、「ダブル」

が「ありのままでいられる」楽園のように描かれていることが興味深い⁽⁸⁾。では、沖縄における彼らは、どのように描かれているだろうか。

沖縄在住として登場するのは、二人の若い女性である。一人目は、ラジオでパーソナリティを務めており、ラジオ番組のスタジオでは軽快な日本語でしゃべっているが、インタビューのときは流暢な英語で話す。

「人にどこの血が混ざっているのか聞かれたときは、半分アメリカ人で、母は沖縄人だと答えるの。バタ臭い顔だから石を投げられたりいじめられたけど、そのこと自体は大して気にならなかったわ。勝手にすればって…。ときには妬まれてる感じもしたわ。だからって泣いて暮らすわけにもいかないもの。」(画像 4)

もうひとりの女性は、学校の体育館で、華麗な新体操の演舞を披露してくれる。彼女は、日本語でインタビューに答えている。

「沖縄県はやはりほとんどが日本人ですよ。ですから学校で、まあアメリカ人ってということで、小さいときには言われましたね。その言葉にすごく傷つき、親に泣いて、私アメリカ人って言われるって言ったら、お母さんが、なんで、あんた外人でしょ、当たり前でしょってすごく強く言われたのは覚えています。それからはもう自分は外人なんだな、ハーフなんだなということに自覚を持ち、もうそれで、何を言われても当たり前だっということ、そういうふうになりましたね。」(画像 5)



画像 4・5：レジー・ライフ監督 “DOUBLES: Japan and America's Intercultural Children” (邦題：ダブルズー日米二つの文化を生きる)。©Global Film Network

この後に、次のようなナレーションが、二人のエピソードを締めくくる。

「彼らのようなダブルズの成功、前向きな姿勢は、ふたつの文化に生きる子どもたちの誇りなのです。」

上記のシーンは、作品が始まって9分40秒と、ほぼ冒頭と言ってもよい位置にある。そこから他の都道府県に住む「ダブル」の語りが続いていくのだが、とくにここでは沖縄の地域的な特性には言及がなされず、それをうかがわせるような語りもない。むしろ、二人の語りには、この作品に次々に登場する語りの基調とも言うべきものがよく表れている。それは、「否定的な体験もあったが、それを乗り越え、私はふっきれている」という語りの型である。そして、「石を投げられ」「親に泣いて」というような内容のシーンにおいてさえ、語り手がまっすぐにカメラを見つめ、ときには微笑を浮かべているという表情もまた、他の多くの語りにも共通している。

ここで感じさせられるのは、マイノリティの〈声〉を収録し、彼らを肯定的に描くドキュメンタリーを制作することの難しさである。そのような企図は、作品全体としては成功を収めつつも、一面では、採用されているドキュメンタリーの手法自体によって裏切られているように思われる。レジー・ライフが有している高度な境界性をもってしても、むしろそれゆえに、「ダブルズの成功、前向きな姿勢」というまとめ方は、小さからぬ違和感をもたらす。たとえ「ダブル」でなくても、本名と素顔をさらしてカメラの前で語るとき、どれだけの人が、ポジティブなオチをつけずに自己を表象できるであろうか。そして「ダブル」として「前向きな姿勢」で語ることはできない当事者がいるとすれば、その圧倒的多数は、カメラの前にそもそも座りはしないのではないかという疑問が生じるのである。

3. コントの舞台における「島ハーフ芸人」の“自虐”ギャグ

— 「抱腹絶倒！沖縄ランド」沖縄お笑い芸人 FEC

「お笑い米軍基地 7」（2011年）

「お笑い米軍基地」とは、沖縄お笑い芸人 FEC という団体がほぼ年に1度のペースで提供している、複数のコントと1作の芝居から構成されたパフォーマンスで、2012年に第8回目を迎えている。毎年、立ち見にも入れない客が出るほどの盛況である。舞台の実録は、DVD化されて市販されている。

「お笑い米軍基地」は、お笑い芸人のまーちゃん（小波津正光）が、沖縄国際大学に米軍のヘリコプターが墜落した2004年の8月当時、沖縄県外で活動しており、「大学にヘリが落ちたというニュースよりもオリンピックの方が大きく

報道される全国紙の紙面」というものに驚嘆したことに端を発しているという [小波津 2006]。それまでもまーちゃんは沖縄ネタでコントをやっていたのだが、そのときに「米軍基地を笑え！」という「お笑い米軍基地」の核心となる着想を得た。沖縄で起こった大事件に関心を払わない「ナイチャー」たち、とんちんかんな日本の政治家と横暴きわまりない米軍に対するまーちゃんのツッコミは、エッジの効いたお笑いのパフォーマンスの中で炸裂するのである。さらにそこでは、「ウチナーンチュ」もまた、笑いのめされる対象となる。たとえば、基地に反対する市民が手をつないで基地を包囲しようという「人間の鎖」というイベントで、どうしても鎖が繋がらなくてじたばたするおじさんは、「どうしてそんなに焦っているの？」と聞かれて、「早くこれをやり終えて、基地内のフェスティバルに遊びに行きたいからさ」と答えたりする。

ここで取り上げるニッキー（保田 創）が登場するコントは、2011年に公演された第7回目の「お笑い米軍基地」で演じられたものである。筆者は2009年からこの公演に通っているが、ニッキーは筆者が知る限り2011年に登場し、しかし2012年には役者としていくつかのコントで役割を演ずるだけで、自分自身をネタにしたパフォーマンスはなかった。2011年にニッキーが活躍したコントは、「抱腹絶倒！沖縄ランド」と題されている。

まず、観光旅行中の「ナイチャー」のカップルがいちゃついているところへ、謎の沖縄のおじさんが客引きにやってくる。おじさんは二人のために標準語で喋っているのだが、それでも二人にはよく聞き取れないことがある。おじさんは若い男の肘をつつき、「おい、あれ、彼女か？」とにやにやする。ひゅーひゅー、「美人だな」ときつと言ったのだと思うのだが、よく聞き取れず、照れ笑いする二人。実はおじさんは笑顔のまま、「やなかーぎー」と、その時だけウチナーグチで、「ブスだな」と言っているのである。客席は爆笑で揺れている。

おじさんは二人を、「沖縄ランド」というテーマパークに誘う。「ミッキーマウスとかいるの？」と聞かれて、「沖縄ランドにはニッキーマウスがいるさ」というので登場するのが、「今売りだし中の島ハーフ芸人」、ニッキーである。頭にミッキーマウスの耳をつけ、軽快な足取りで出てきたニッキーは、「ナイス・ハーフ！」という決め台詞をはさみながら、“自虐ネタ”の（あるいはその体裁をとった）ギャグを飛ばすのである（画像6）。

「自分ハーフなんで、おばあちゃんがウチナーンチュなんですけど、僕のおばあちゃん、僕を呼ぶとき、名前じゃなくて、『やー！アメリカー！』って呼びます。」

“ナイス・ハーフ！”

「この前、58号線を運転してたら、道沿いに故障してる車があったんで、大丈夫かなあと心配になって、その車の後ろに停めて、運転手に、『大丈夫

ですか?』って聞きに行ったら、通りすがりのアカの他人に、『やー、またアメリカが事故ってるばー』って言われました。」

“ナイス・ハーフ!”

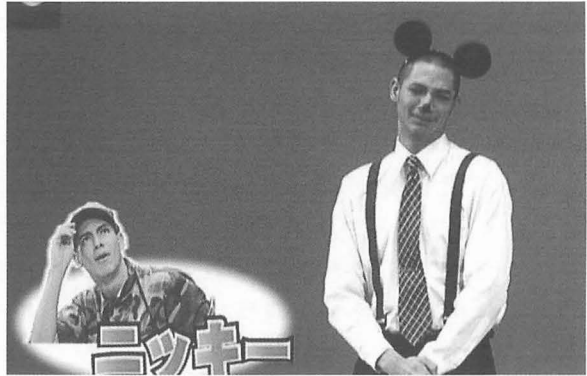
ニッキーは、180センチを超える長身で彫りの深い顔立ちの、まさしく憧れの“ナイス・ハーフ”的な外見をしているために、彼の口から出てくる“自虐ネタ”との落差には相当なインパクトがある。実話なのか創作なのかは不明だが、内容には、『島ハーフ』の日常にはそういうこともあるだろう」と思わせるだけのリアリティがある。

「お笑い米軍基地」は、まーちゃんが企画・演出をしているので、ニッキーの“自虐ネタ”がどの程度「自己表象」と言えるかはわからないが、少なくとも舞台の上のニッキーは、自分自身を直截にネタにして笑いをとっているように見える。

ニッキーは舞台の上で、「自分ハーフなんで」と言う。「ハーフ」は、筑紫哲也ニュース23が、当事者がそう自称している場面においてさえその呼称を避け、レジー・ライフが「ハーフよりもダブルがしっくりくる」という当事者の〈声〉を並べることで、暗に否定した言葉である。しかし理念でも理屈でもなく、沖縄の米軍基地をめぐるリアリティにツッコミを入れる「お笑い米軍基地」においては、当事者はさらりと「ハーフ」を自称する。その“自虐ネタ”の内容からして、これでもし「ダブル」を名乗ったりしたら、実態と自称は大きな齟齬をきたすだろう。

“自虐ネタ”の中では、彼は「ハーフ」とすら呼ばれない。「アメリカ」という強い侮蔑のニュアンスをもつ呼称は、二つ目のギャグではアカの他人によって、おそらく米兵と間違われて発せられ、一つ目のギャグでは祖母によって、彼が何者であるかを知っている血縁者によっても発せられている。そして「島ハーフ」とは、このように米兵と間違われ、血縁者にさえ罵倒のような言葉で呼びつけられる、沖縄土着の「ハーフ」の蔑称なのである。それゆえにニッキーは「自分島ハーフなんで」とは自称せず、沖縄ランドに客引きをする謎のおじさんが、彼を「島ハーフ芸人」と呼ぶ。

ただし、この「島ハーフ芸人」という呼称は、「沖縄ランド」という架空のテーマパーク、コントの中のさらにもうひとつのフィクションの世界で、「ニッキー



画像6:「抱腹絶倒! 沖縄ランド」沖縄お笑い芸人
FEC「お笑い米軍基地 7」©C-POP TV

ーマウス」に対して用いられる呼称である。「お笑い米軍基地」のホームページやポスターなどで、ニッキーが「島ハーフ」というタイトルを冠されることはない。“自虐”ギャグを飛ばす「島ハーフ芸人」は、「お笑い米軍基地」そのものではなく、そのコントの中の「沖縄ランド」という、二重のフィクションの中から、「ハーフ」が「アメリカー！」と罵倒される沖縄のリアリティにツッコミを入れるのである。

わずか数分のコントの中に、「ハーフ」、「アメリカー」そして「島ハーフ」という自称と呼称が飛び交う。これと対比させると、筑紫哲也やレジー・ライフ、そして筆者自身も行ってきた「ハーフ」忌避のいかがわしさが露呈されてしまう。「ハーフ」という言葉を使うことを避けたところで実態はそこにあり続けるということが、つきつけられるように迫ってくるのである。

その「抱腹絶倒！沖縄ランド」に続く「ウチナーな結婚式」というコントは、さらにトリッキーな構造をもっている。主役は、男性のお笑い芸人が扮した、たらこ口にべったりと口紅を塗った「アメじょ」の花嫁である。ニッキーは彼女が結婚する米兵を演じており、結婚式の最中にその「アメじょ」と激しくいちちゃつてみせる（画像7）。司会者を演ずるまーちゃんは、あくまで明るくさわやかに、彼らが「クラブで」知り合ったことなどを述べ立てる。新婦の友達たちである3人の「アメじょ」が祝いのスピーチをするが、祝いの言葉はそちのけで、お互いのアメリカ人の彼氏をめぐって取り合い、ののしり合う。全員、男性の芸人が女装していて、胸を大きく開けたドレスに染めた髪という定番の装いで、彼からの電話には3人が声をそろえて“Yo men, what's up?”と、ひとつ覚えのように下品なスラングの英語を得意げに話す。



画像7:「ウチナーな結婚式」沖縄お笑い芸人 FEC「お笑い米軍基地 7」 ©C-POP TV

「ウチナーな結婚式」では、米兵役のニッキーは花嫁をさわりまくっているだけであり、一言も発しない。彼は、「アメじょ」の醜さや馬鹿さを笑い倒すための舞台装置となっている。しかし、このすぐ前のコントで、ニッキーは「ナイス・ハーフ！」のギャグを飛ばしていたのである。彼が「島ハーフ」なら、ここでいちちゃつている醜い花嫁と愚かしい米兵というのは、彼自身の両親の、悪意に満ちたデフォルメではないのか？

いったい誰が誰をスティグマ化し、誰が誰によって笑われているのだろうか？

表象のポジショナリティは、主体－客体、当事者－非当事者という図式に収まらない、複雑な様相を呈するのである。

「お笑い米軍基地」において、「島ハーフ芸人」ニッキーの“自虐ネタ”は今のところ定番化していないが、「アメじょ」ネタは毎回の舞台で、さまざまなバリエーションで登場し、最も笑いをとれるコントのひとつとなっている。男性のお笑い芸人が扮した、デブでブスで、髪を染めて派手な化粧をして、アメリカ人の男を捕まえようと汲々としている馬鹿女こそが、「お笑い米軍基地」における「アメじょ」である。これでもかというようなステレオタイプの連打に、観客は爆笑している。これは、コント「人間の鎖」の、反基地運動と基地内フェスティバルをかけもちしようとしているおじさんを笑うのと同じように、「ウチナーンチュ」が「ウチナーンチュ」を笑っているのだろうか？それとも、沖縄の男を選ぼうとしない「アメじょ」が、沖縄の男たちから、笑いという制裁を受けているのだろうか？

筆者は、アメラジアンスクールで話をしたひとりの母親の言葉を思い出す。「ご主人とはどこで知り合ったの？」と聞かれた彼女は、少し沈黙してから、「言いたくない。ああやっぱりみたいになることが多いから」と言ったのだった。また、別の母親が、「私は子どもが成人するまでは髪を黒以外に染めないし、人前でお酒を飲まないことに決めてる。私もアメじょって言われたんだよ」と言っていたことも思い出す。「米兵が集うクラブで男を漁る女」という「アメじょ」のスティグマは、アメリカ人男性と国際恋愛や結婚をしている女性たちを深く傷つけてきたのである。

お笑いというものを、ポリティカル・コレクティブに裁くことにはあまり意味がない。しかし、このようなギャクの舞台に、それを演じるお笑い芸人のひとりとして「ハーフ」が立っていることに、観る者はもっと震えねばならないのではないかと思われる。そこにはスティグマ化し、同時にスティグマ化されている当事者がいる。ニッキーはお笑い芸人という特殊な存在、いわば“異形の当事者”であるが、彼が舞台で垣間見せる、スティグマ化される者とスティグマ化する者、笑われる者と笑う者がねじれながら合体する瞬間は、コントの舞台だけではなく、日常にも潜んでいるのではないだろうか。

4. ドラマの中の「ダブル」とジェンダー

—アメラジアンスクール中学生クラス制作“Doubles World”（2011年）

アメラジアンスクールの設立と筑紫哲也 NEWS23 による報道がなされてから13年後、アメラジアン映像プロジェクトチームは、「We are all STARS!! アメラ

ジアンスクールの挑戦」(以下、「We are all STARS!!」と表記)と題したDVDを制作した。そこには、アメラジアンスクールの中学生クラスが制作したドラマとドキュメンタリーが収録されている。これは、「基地の落とし子」という負の表象を、当事者の子どもたちによる自己表現によって乗り越えようとする試みであると言えるだろう⁽⁹⁾。

「We are all STARS!!」は、まず中学生クラスが制作したドキュメンタリーから始まる。冒頭には、アメラジアンスクールの説明として、権利宣言ともいえるべき言葉が述べられている。

「アメラジアンの子どもはアメリカと日本、両方の言語や文化を学ぶ権利があります。なので、アメラジアンスクールでは両方の言葉や文化を教えるダブルの教育を行っています。」(画像8)



画像8:「We are all STARS!!」イントロダクション。©アメラジアンスクール映像プロジェクトチーム。以下同じ。

一方で、この節で取り上げるドラマ“Doubles World”においては、「ダブル」という言葉には、肯定的、理念的な意味合いがまったく込められていない。そこに描かれている主題は、「“ダブル”だけがこの世界の中で違う顔をしていて、『同じ顔の男たち』に狩りたてられ、殺される」という、同化圧力の暴力性なのである。「ダブルの世界」は、このドラマの主人公が行き来する「ふたつ」の世界、すなわち平穏な現実世界と暴力的な異世界のことであり、同時に「ダブル」の子どもたちが生きている世界を含意している。

最初のシーンは、「ダブル」の少女とその恋人が、ささいな口争いをしながらたらたらと歩いている場面である(画像9)。遠景には、沖縄でよく見かける種

類の街路樹のような木が映っている。その退屈そうな日常に、突然、脈絡なく暴力が忍び寄り（画像 10）、昏倒した少女は、気がつくまで一人ぼっちで異世界に佇んでいる（画像 11）。そこに突然、「同じ顔をした男たち」が現れ、武器を持って彼女を追い回すのである（画像 12）。

わけもわからず、恐怖にかられて逃げ回っているときに、彼女は、一人の「ダブル」の少年に出会う（画像 13）。彼は少女に、この異世界の成り立ちを教えてくれる。

「ボスが支配する世界ではみんなが同じ顔をしている。少しでも違う顔をしている人を見つけると、殺して、すべてを同じ顔だけの世界にしようと企んでいるんだ。」（画像 14）

少女は、異世界ではぐれてしまった恋人を心配して泣き出してしまう。少年は助けを求められて、覚悟を決めて隠れ場所から飛び出し、「同じ顔の男たち」を次々に打ち負かしていく（画像 15）。そして最後に、彼がボスに勝利した瞬間、少女と恋人は、もとの日常世界に戻ってきている。相変わらず恋人は調子はずれなことを言い、少女は彼を追いかけて走っていくシーンで、ドラマは終わる（画像 16）。



画像 9 : 「We are all STARS!!」収録
「Doubles World」の冒頭シーン。「ねえ、
どうするの?」「あ～もう好きにしるよ」



画像 10 : 忍び寄る暴力



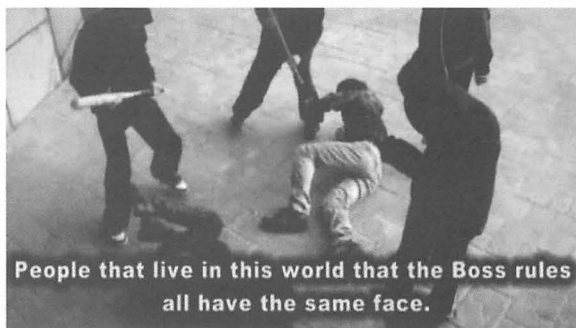
画像 11：異世界で独り



画像 12：追われる「ダブル」の少女



画像 13：少年と出会う



画像 14：異世界の秘密



画像 15：ボスとの戦い



画像 16：帰ってきた現実世界で、恋人を追う少女「ねえ、待ってよ」

このドラマは、「同化を強いる暴力的な世界から、悪に立ち向かい、打ち勝って生還する」という筋書きをもっている。そこに見いだせるのは、同化圧力の理不尽さと暴力性だけではなく、そのような暴力的な世界に対する「戦いの意志」とも言うべきものである。少年の勝利に終わるハッピーエンドには、制作

者である子どもたちの希望が仮託されているように思われる。

一方で、この「戦い、勝利、生還」の物語は、ジェンダー化されたファンタジーによって牽引されている。このドラマは、同化圧力の暴力性に対する、切実な恐怖や怒りを起点としてスタートするのであるが、では、どうやって話を完結させるかというところで、「少年が戦い、少女を救う」という、また別の抑圧性を帯びたフィクションの枠組みが登場しているのである。それは「ダブル」の少女を、同化圧力とは別の形で周縁化する、ジェンダー化されたファンタジーである。その少女が主人公であったはずなのに、彼女自身は、戦いと生還のプロセスには主体的にコミットしない。彼女は泣き、助けを求め、助けられるという「女性」の役割に終始し、「男性」によって救われる対象として客体化されている。このドラマは、マイノリティとしての苦しみと戦いを描いていたのに、女性という別のマイノリティを周縁化する形でハッピーエンドに着地しているのである。そのストーリー構造は、マイノリティの周縁化をめぐる、矛盾あるいは欠落をはらんでいると言えるだろう。

主人公の少女が、異世界で自分のために戦ってくれた少年とは結ばれず、現実世界で恋人を迫りかけるシーンでドラマが終わっていることも興味深い。異世界に滑り込む前の、現実世界での少女と恋人の会話は、「ねえ、どうするの？ねえったら」「ああ～もう好きにしるよ」という、夫唱婦随のジェンダー規範をカジュアル化したような代物であり（画像 9）、帰ってきて彼女が最後に発するセリフは、その恋人に対する、「ねえ、待ってよ」というひとことなのである（画像 16）。ドラマにおいて、異世界におけるジェンダー構造は、現実世界にほとんどそのまま引き継がれている。

キャストの一覧は、このドラマの監督と助監督を務めた生徒たちが、三人とも女性であることを示している。ここにも、誰が誰をスティグマ化しているかという問いは通底している。しかし、「島ハーフ芸人」ニッキーの確信犯的な“自虐”とは異なり、「少年に助けてもらう」「彼氏についていく」という性役割が、主人公であったはずの少女からイニシアティブを徹底的に奪っていること、「ダブル」を描いた作品に、ジェンダーをめぐるもうひとつのヘゲモニー関係が錯綜してきていることについて、作り手たちが自覚的に表象している気配はうかがえない。

その反面、このような「ハッピーエンド」をアメリカンスクールの中学生たちが設けたことには、別の意味で、ひとつの可能性があるのではないかとも考えられる。そこにうかがえるのは、「ダブルはこういう形で危機を乗り越え、成長すべきだ」というような、規範化されたエンパワーメントの不在である。もしそのような物語の型を生徒たちが学習していたとすれば、それはおそらくストーリー展開に影響を及ぼしたであろう。その場合は、作品には構造的な欠陥が生じないとしても、予定調和的なマスター・ナラティブにとってかわられ

ていた可能性がある。そのようなパターンの不在は、ジェンダー化されたファンタジーに物語を篡奪されるリスクをはらんでいるが、表象における主体的なコミットメントのための空白が残されていることをも含意しているように思われる。

結びに代えて

マイノリティが非当事者に「代弁」されたり、対象化されたりして一方的に表象されてきた位置から脱し、表象と発信にコミットメントする動きは、さまざまな領域で見いだせる。在日ブラジル人の高校生が、自分の体験と思いを描いたドキュメンタリー作品「レモン」などは、その一例であると言えるだろう。近年、動画の撮影と編集の技術が急速に一般化するにつれて、このような動きはますます加速しつつある。

ただし、当事者による表象へのコミットメントは、日本において、決して最近になって始まったものではない。「さようなら PC」（1972年、原一男監督）というドキュメンタリー映画では、PC者（重度脳性マヒ者）が通行人にカメラを向け、その撮影の様子を原監督がさらに撮影するという手法で、「“視られる”存在と“視る”存在の逆転」が試みられているという〔定藤 2006〕。定藤は、この作品の制作と自主上映運動を、PC者の生活自立運動の原点として位置づけている。

「さようなら PC」は、当事者－非当事者の間にある深い断絶をあらわにしている。それに対して、沖縄の「アメラジアン」をめぐる映像表象においては、むしろ当事者－非当事者という単純な構図に収まりきれない境界性、ステイグマ化される者が同時にステイグマ化するという構図、そしてジェンダーをめぐるヘゲモニー関係の錯綜が見いだせる。

ブラック・フェミニズムをめぐるあまたの議論を待つまでもなく、マイノリティがその内部のマイノリティを差別する「抑圧の移譲」、「内なるマイノリティとしての女性」の問題は、さまざまな領域で生起してきた。マジョリティに抗する運動体として、当初は凝集された単一の当事者性を打ち出していたマイノリティの内部からは、そのような一枚岩的な理念型に収れんされなく複数の声>（スピヴァク）が表出してくる。そのプロセスは、沖縄の「アメラジアン」をめぐる表象において、フェミニズムの方向からではないにしても、すでに始まっているかもしれない。ジャーナリストや映画監督が暗に「ハーフ」という言葉を否定しても、理念のコーティングを一枚はがせば「アメリカー！」と罵倒される「島ハーフ」の現実があることを、コントの舞台に立つ“異形の当事者”は露わにしている。母親たちが、「ダブルの誇り」を理念としてアメラジアンスクールを設立していても、「同じ顔の男たち」が迫ってくる「ダブルの

世界」では、そんな理想は武器にはならないことを、子どもたちが制作したドラマは示唆している。沖縄の「アメラジアン」をめぐる映像表象は、決して規範化された単一の「エンパワーメントの物語」には回収されず、スティグマ化されつつスティグマ化するヘゲモニー錯綜をはらみながら展開している。それは、表象をめぐる当事者性、そして、エスニック・マイノリティとジェンダーの関係をめぐって、すぐれて示唆的である。

表 1：筑紫哲也 NEWS23 特集「もうひとつの沖縄の現実－アメラジアン」

タイム	場面	内容
	スタジオ スタジオ	筑紫哲也が特集のタイトルを述べる 記者によるアメラジアンという用語の説明
0:00:30	手紙	クリントン大統領に宛てた手紙。父親の退役によって基地内学校の無償教育の対象から外された少女。
0:00:57	蝉が鳴く風景	(ナレーション) 学校に行きたい、勉強したい。行き場をなくしたアメラジアンと呼ばれる子どもたちの叫びが、
0:01:01	戦闘機の飛行	この夏、ひとつの形となって現れました。
0:01:11	アメラジアンスクール教室	アメリカ人教師がスクールの理念を読み上げる
	校舎、通学風景	沖縄県の施設を間借りしてスタートした、母親たちの手作りの学校。
0:01:29	教室	そこには、アメラジアンだけが抱えるある事情がありました。
0:01:33	手紙を書いた少女	あっちでもいつも“Japanese trash”(日本のゴミ)とか、戦争のこととかでも、“Yeah, We won!”とか、“勝ったぜー”とか言われて、こっちに来たらアメリカーアメリカーと言われるから、自分は何であるわけ？って考える、たまに。
0:01:58	教室	(ナレーション) そんな彼女たちが取り残されている現状が浮き彫りになったのは、ある騒動がきっかけでした。
0:02:04	読谷村「象の檻」	発端は象の檻のすぐ近くに、沖縄で唯一のアメリカンスクールが移転してきたこと。その場所は産業廃棄物処理場跡地であった。
0:02:31	沖縄クリスチャンスクール	読谷村に 96 年に移転、97 年に敷地内から水蒸気の噴出、異臭があった
	97 年 4 月当時の VTR	体調を崩す子どもが続出、沖縄県が立ち入り調査を行って「安全宣言」を出した。反発した父母らによって約 100 人の生徒が自主退学。
0:03:19	アメラジアンの母親	安全宣言について、「やっぱりこの子たちは追いやられている存在、廃棄物同様なのかなって思ったんですよ。」子どもを通わせることはできなかった。
0:03:25	基地内、星条旗と日の丸	(ナレーション) 子どもたちにとって、そこは最後のよりどころでした。
	基地内学校	基地内学校では父親が退役、両親が離婚すると無償教育を受けられなくなる。
0:03:50	基地周辺を歩く米兵家族	民間人の授業料は年間約 160 万円。母子家庭が多いアメラジアンには無理。
0:03:57	アメラジアンの子どもの食事風景	アメラジアンの子どもの多くは日米二重国籍。日本の公立学校にも通えますが、それでは何の解決にもならず、彼らの居場所さえ見つかからないのが現状です。
0:04:16	自転車で行く少年	(ナレーション) 父親の退役で浦添市の学校に転校した少年。最初、日本の学校は楽しいと言っていたが、まもなくその表情から笑顔が消えた。

	取材を受ける母親と少年	(母親)慰霊の日前後の平和学習をきっかけに、息子がいじめにあった。
0:05:15	沖縄戦のVTR。炸裂する爆弾。	(ナレーション)平和学習がアメラジアンの子どものいじめの原因になっている。
0:05:35	母親と少年	(母親)息子が登校拒否を起こし、相談した担任からは「アメリカンスクールに行った方がいい」と投げやりに言われた。
0:05:52	和服で写真に写っている少年	(ナレーション)日本人としての希望は、無残にも失望に変わりました。
0:06:13	母親と少年	(母親)どうだった、日本の学校？好きだった？(少年は微苦笑を浮かべて首をひねる)
0:06:12	ランドセル	(母親)ランドセルつけるの好きだったよね？(記者)どんなところが？(少年)かたち。
0:06:20	花と蝶	(ナレーション)アメラジアン多くは、彼のように周囲から自己を否定され、自分の存在に心を悩ませると言います。
0:06:29	アメラジアンの成人女性	(ナレーション)子どもの頃、自分が養女だと知った。父親は米兵だとしかわからない。
0:07:05	座喜味城址。背景は沖縄の海	(女性)父親の顔も名前も知らない。アイデンティティ・クライシスが若い頃は一番の苦悩だった。日本人としての私とアメリカ人としての私、その二つがないと私にはなれない。
		(ナレーション)周囲の差別の目がそれに拍車をかけました。
0:07:40	制服を着た集合写真	(女性)制服を着て道を歩いているだけで、父親がいない子だと周囲にわかってしまう。
0:08:15	記事「県立校に国際児クラスを」	(ナレーション)アメラジアンの父母らは何度も行政のドアをたたいた。
0:08:22	太田昌秀知事	懇談の場で知事に話をする元軍人のアメリカ人の父親。
0:08:35	アメラジアンと両親のいる家庭	(ナレーション)親子の間には言葉の壁がありました。父親が英語で話している内容を、子どもが聞き取れていない様子。
0:09:25	アメラジアンの父親	(父親)子どもには英語を話してほしいが、親には教える時間が無い。
0:09:44	アメリカ国防総省	太田知事がアメラジアンの教育支援を訴えるが、前向きな回答はなし。
0:09:59	日本の国会VTR	(文部大臣)「二重国籍の方にのみ差別があるという実態では必ずしもないんだろうと思います」
0:10:12	戦闘機の飛行、星条旗と日の丸	(ナレーション)基地から放りだされ、差別や偏見の波にもまれる子どもたち。
0:10:20	沖縄県庁	母親たちが望む、自己を肯定できる新たな学校作りについても、県の担当者との間で、その議論はかみ合っていない。
0:10:28	義務教育課課長	日本の学校教育ではなくて外国人の教育をしてくれと。そうしますと日本の学校教育制度の枠外の教育が求められているわけです。
0:10:42	アメラジアンスクール登校風景	(ナレーション)立ちほだかる制度の壁。子どもたちは大人になっていく。
0:10:54	教室	(弁護士)父親の米兵から養育費を受け取っていないケースが多い。
0:11:27	反基地県民集会VTR	(ナレーション)アメリカ海兵隊による少女暴行事件。前出のいじめに遭った少年の家族が運命を翻弄された。
1:11:42	家族写真のアメリカ人父親	(母親)家族でよく利用していた居酒屋で、門前払いを食わされた。「アメリカ人はアメリカ人ですから」
		(ナレーション)父親は反米の感情に耐えきれず帰国。
	母親	(母親)あなたたちみたいな女性は、アメリカ人の使い古しで、沖縄の人と再婚するなんて考えない方がいいよ。私たちは使い古しか。じゃあ、その子どもは何て呼ばれるんだろうかって、なんかもう、むなしかったですね。

0:12:47	花、赤瓦の屋根	(ナレーション) 基地の落とし子という表現がぶつけられるアメラジアンたちにとって、沖縄に生きるからこそ、基地への思いは複雑です。
0:12:58	アメラジアンの母親	自分の国はフェンスの中にあると思っていますよね、小さいながらに。
0:13:21	アメラジアンの成人女性	基地はないほうがいいんです。だけど実際問題、その基地があったからこそ、私たちハーフが生まれた。基地は私たちにとって故郷なんですよね。
0:13:46	フェンスの向こうに基地と夕日	アメリカで別の家族と暮らしている父親と文通を始めたアメラジアンの高校生。
0:14:04	夕日の沈む海	(手紙) 友達にお父さんの写真を見せると、似ていると言われてうれしかった。
0:14:41	夕日の沈む海	(ナレーション) 半分ずつというハーフではなく、ふたつの文化を受け継いだダブルの誇りを持ちたい。そう願うアメラジアンたちと、そして彼らを取り巻く状況は、戦後の沖縄の歴史が生んだ、もうひとつの現実です。
0:14:50	スタジオ	(記者) 基地への思いひとつとっても単純に割り切れない思いがあるわけですが、沖縄から米軍基地がなくなる限り、このような子どもたちは存在し続けるんですね。
		(筑紫哲也) 過去の問題ではないということですね。

※本稿で取り上げるドキュメンタリー映画、コントとドラマはそれぞれ DVD 化され市販されているが、このニュース特集については過去に報道されたものであり、一般には映像の入手が困難であると考えられるため、内容をとりまとめたものがこの表である。斜体となっている部分は、要約ではなく、音声をそのまま文字起こししたものであることを示す。

【注記】

- (1) 「アメじょ」は、「アメ女」と解されている場合が多いが、沖縄語でいう「アメリカじょうぐう」(アメリカ上戸) からきており、「米兵の男をもつばらに追いまわす女」を含意している。ニュアンスとしては「売女」に近いが、性的淫蕩だけでなく、戦勝者である米兵に媚びを売る女として、蔑みのアクセントは「アメじょ」の「アメ」の部分に置かれている。第二次世界大戦後、沖縄県以外の都道府県でも用いられた「パンパン」という蔑称に近い。
- (2) 筆者はこれらのニュース特集、ドキュメンタリー映画、コントとドラマを分析するにあたって、「映像表象における沖縄の『アメラジアン』」という表題を付しているが、それは「アメラジアン」という用語を、他の自称や呼称を総称する特権的なものとして位置づけようとするものではない。現時点において、「ハーフ」「ダブル」「アメラジアン」などの自称や呼称を総称するニュートラルな言葉というものは存在しない。「アメラジアン」もまた、アメラジアンスクールを設立した母親らによって選ばとられ、理念を込めて用いられている言葉である。ただし「ハーフ」「ダブル」については、本稿において、その言葉自体に否定的または肯定的な意味合いを込めて表象している事例を分析で取り上げるため、これらを総称とするのはふさわしくないという判断で、表題には「アメラジアン」という言葉を用いている。
- (3) 本稿では、ニュース特集やドキュメンタリー映画に実名が出ている場合であっても、プライバシーに対する配慮の観点から、実名は表記しない。ただし、「お笑い米軍基地」の芸人の芸名およびブログに記載されている名前は例外としている。
- (4) このニュース特集では、成人アメラジアンの女性が「基地があったから私たちハーフが生まれた」とカメラの前で語るシーンがあり、それはそのまま放送されている(表 1 タイム 0:13:28)。ただしその数分後、「半分ずつというハーフではなく、ふたつの文化を受け継いだダブルの誇りを持ちたい。そう願うアメラジアンたちと、そして彼らを取り巻く状況は、戦後の沖縄の歴史が生んだ、もうひとつの現実です」というナレーションによる特集全体のしめくりが挿入されており、この番組の「ハーフ」と「ダブル」という言葉に対するスタ

ンスをうかがわせるものとなっている（表1 タイム0:14:41）。

- (5)この特集番組の放映から間もなく、アメラジアンスクールは駐労センターの貸会議室から宜野湾市大山の民家に移転した。現在はさらに移転し、宜野湾市志真志の宜野湾市人材育成センターめぶき1階部分に校舎がある。
- (6)2012年9月現在、アメラジアンスクールは宜野湾市人材育成センターめぶき1階部分の無償貸与、おきなわ女性財団からの2名の日本語指導員の派遣という公的支援を受けている。
- (7)子どもたちの多くは日米の二重国籍を持っているため、保護者には日本の義務教育の就学義務があるとされる。現在、アメラジアンスクールは、「言葉の問題、家庭の事情、地域の実情」などによって公立学校に学びの場を持ってない「重国籍児等」の受け皿となる民間の施設と位置づけられ、子どもが在籍している地域の公立学校の学校長が認めれば、アメラジアンスクールに通った日数が公立学校の出席日数となる「出席扱い」が適用されているが、公立学校への「学校復帰」を前提とした施設という位置づけとなっている〔沖縄県教育委員会1999、アメラジアンスクール2012:3〕。
- (8)ここでも最後に、自殺した日本人の母親についてのエピソードが挿入され、ハワイのイメージがエスニック・パラダイス一色に塗りつぶされないように配慮された構成となっている。
- (9)アメラジアン映像プロジェクトチームは、アメラジアンスクールの中学生クラスを制作の中心に位置づけ、他のメンバーはそのサポートという形で関与した。そこでは、映像制作を通じて子どもたちが「自己発見」することが第一の目的とされている。その背景として、これまでの報道においては「基地の島・沖縄」の象徴としてアメラジアンの子どもがまなざされることが多く、当事者による発信の機会はなかったことが記されている〔翁長2011: pp.50-58〕。

【参考文献】

- 沖縄県教育委員会（2011年11月9日）「学校外の民間施設で相談・指導を受けている児童生徒への対応について」（通知、教義1858号）。
- アメラジアンスクール・イン・オキナワ（2012）『NPOアメラジアンスクール・イン・オキナワ 2011年度年次報告書』。
- 小波津正光（2006）『お笑い米軍基地—基地に笑いでツッコむうちなー（沖縄）的日常』グラフィック社。
- 翁長良（2011）「総合学習—ビデオワークショップと映像作品を用いた交流授業」アメラジアンスクール・イン・オキナワ『NPOアメラジアンスクール・イン・オキナワ 2010年度年次報告書』、pp.50-58。
- 定藤邦子（2006）「大阪・兵庫の障害者自立生活運動の原点」『Core Ethics』第2号、pp.129-140、立命館大学大学院先端総合学術研究科。

【引用・参考サイト】

- アメラジアンスクール・イン・オキナワ ホームページ
<http://www.amerasianschool.com/>（2012年9月7日情報取得）
- アメラジアン映像プロジェクトの作品を視聴できる You Tube のサイト
<http://www.youtube.com/watch?v=ZMsVH-COyWE>（2012年9月7日情報取得）
- 公益財団法人トヨタ財団ホームページ、助成の事例・成果物レポートのサイト
<http://www.toyotafound.or.jp/project/proreport/publications/2011-0620.html>（2012年9月4日情報取得）
- Global Film Network のホームページより映画“Doubles”について情報提供をするサイト
<http://www.globalfilmnetwork.net/doubles.html>（2012年9月27日情報取得）
- 沖縄お笑い芸人 FEC ホームページより「お笑い米軍基地」について情報提供をするサイト
<http://fec.asia/owaraibeigunkichi/index.html>（2012年9月27日情報取得）

【分析に用いた DVD】

アメラジアン映像プロジェクトチーム（2011）「We are all STARS!! アメラジアンスクールの挑戦」、自主制作。

レジー・ライフ監督（1995）“DOUBLES: Japan and America's Intercultural Children”（邦題：ダブルズ—日米二つの文化を生きる）（1995年），Global Film Network。

企画・脚本・演出：小波津正光（2011）「お笑い米軍基地 7」、C-POP TV。